

市制施行90周年は100周年の先に向けた第一歩!!

市民目線と現場主義によるわくわくするまちづくり

首都圏でも有数の交通の要衝 多様な地勢に多彩な魅力

千葉県北西部に位置し、古くは下総国府が置かれた歴史を持つ市川市は、昭和9



東京都江戸川区との市境を成す江戸川。右端の橋は京成本線、真ん中の橋は国道14号、左端の橋はJR総武本線

(1934)年11月3日、旧東葛飾郡市川町、同八幡町、同中山町、同国分村の3町1村の合併により、千葉県では千葉市・銚子市に次ぐ3番目に市制を施行。本欄掲載号の発行直後となる本年11月3日に、市制施行90周年の節目を迎える(※取材日は本年7月22日／原稿作成は9月20日)。

市制施行時に約4万1000人だった人口は順調に増加し、旧東葛飾郡大柏村(昭和24/1949年)の編入時に10万人を突破。さらに、東葛飾郡行徳町(昭和30/1955年)、同南行徳町(昭和31/1956年)の編入を経た後、昭和40年代半ばからは東京都心に至近なベッドタウンとして急速に人口が増加。特に昭和50年代前半までは毎年約1万人ずつのペースで増えていったとされる。

それ以降も毎年6000人〜8000人の増加を順調に続け、令和2(2020)年の国勢調査時には49万6676人と、50万人台目前にまで達した(※面積は昭和37年以降に埋め立てられた行徳・南行徳地区の臨海部も含め、現在は市制施行当初の約2.5倍、56.39km²となっている)。

現在も市川市の人口は増加傾向にあり、50万人台へ到達する可能性が高まっている。一方では、平成17(2005)年から老年人

口が年少人口を上回るようになった。令和5(2023)

年9月末時点の市川市の高齢化率は21・

5%。同年の高齢化率全国平均29・1%に比較すると高くはない。しかし、合計特殊出生率(令和4/2022年)は1・17(近年のピークは平成27/2015年の1・39)で、同年の全国平均1・26と比較すると、水準を下回る(同年の千葉県全域の平均は1・18)。このように見ていくと、全国の都市と同



こう 甲
たなか 田中
市川市長



行徳地区は江戸湾岸最大の塩生産地だった。寺社や宮大工が多く神輿（みこし）造りも盛んに、「行徳まつり」には今も地元で造られた神輿が勢ぞろい（市川市行徳ふれあい伝承館に展示の江戸神輿と行徳まつりの神輿渡御）

様に、市川市では少子高齢化の影響が明確に表れつつあるが、若い世代の転入が多く、総人口における人口動態は安定的に推移しているといえる。

市川市におけるこの安定した人口動態の要因としては、1級河川江戸川を挟んだ西隣が東京都（江戸川区）という立地条件が、やはり大きいだろう。市川市の地勢は、東京湾岸から内陸部に至るまで実に多様性に富んでいる。そして、いずれの地区も東京都心部から20 km圏内にあるのが大きな特徴だ。

例えば市川市役所第1庁舎の最寄り駅であるJR総武本線・本八幡駅から東京駅までは、途中1回の乗り換えも含め、所要時間は最短23分なのだ。東京側から見て市川

市の最奥部に近いと思われる鉄道駅の一つ、市域北部（内陸部）に位置する大町駅（北総鉄道北総線）から東京駅までも所要時間は最短47分の通勤圏だ。

東京駅を起点にすると、渋谷駅までの所要時間は最短20分、新宿駅までは最短14分。千葉県で最も東京都心部に近いまち・市川市の交通環境は、東京都心部に準ずるほど至便だということが分かる。

実際、市内を走る鉄道路線は、JR、私鉄、地下鉄（東京メトロ、都営地下鉄）を合わせ、なんと7路線（計16駅）が稼働している。道路も首都高速湾岸線、東関東自動車道、東京外郭環状道路、京葉道路の各結節点として、計10カ所近くに及ぶJCT・IC・TB・PAなどが市内に立地する。一般国道、主要地方道に至っては、網の目のように市域を覆っており、東京国際空港（羽田空港）へもリムジンバスでつながっている（空港への鉄道アクセスでは、JR総武快速線と京成本線が成田国際空港に直結している）。

市川市のこうした交通の要衝ぶりには、水戸街道や日光街道とも連係する佐倉街道（成田街道）の宿場町（市川宿、八幡宿など）としてにぎわい、江戸川を活用した物流の集散地（行徳）としても栄えた、近世以来の伝統（現在の市川市の主

要エリアは、特に行徳地区などの塩田地帯を抱えていたこともあり、徳川幕府の天領だった時代が長い）が基盤にある。

「東京の都心部に近く、しかも自然が豊かで風光明媚。塩も含めた海の産物、川の産物、米や市川のシンボルの作物の梨をはじめとする里の産物にも恵まれた土地柄は、素朴な人情とも相まって、特に近代以降は、永井荷風、幸田露伴、北原白秋、東山魁夷、井上ひさしなど、多くの文化人を惹き付け、各界の要人が別宅を構えるなど、東京の奥座敷のようなにぎわいを見せていました。」

明治時代には、旧陸軍の施設が国府台地区に次々建設されていったことなどから、内陸部のインフラ整備も進みました。また、戦後は陸軍施設の跡地に大学や高校、病院、各種運動施設など、広大な敷地を要する施設が集中して立地することになり、文教・



学園都市としての、市川市の現在の都市的側面の構築に、大きく寄与することになります。

現代においては、千葉県に居住し、東京都に通勤通学する人々は『千葉都民』などとも総称されます。しかし、江戸川を挟んだだけで東京都と接する市川市の市民の中には、千葉県ではなく、東京の地続きのまちに暮らしているという意識の方が強いような傾向も見られます。実は職員の意識にも、それは少なからずあります。

そこが現在の市川市の置かれた環境面の強みでもあると同時に、半面、実は中途半端な立ち位置を醸成してしまっている部分でもあるのではないかと、市長就任以前から、私は考えておりました」

そう語るのは、田中甲市川市長だ。生まれも育ちも市川市の田中市長は、市川市議会議員、千葉県議会議員を経て、平成5（1993）年から3期にわたり衆議院議員を務めた後、令和4年3月27日に実施された市川市長選挙に出馬し、当選。本年度1期3年目を迎えている。

100周年の先の未来に向け 今本当に必要な市政の実施

「90年間に及ぶ市川市政は、私も含めて13人の市長が担ってまいりました。その中で最も新しい代の私が、就任3年目にして90

周年の大きな節目を迎え、100周年に向けた第一歩を担うことになりました。まさに身の引き締まる思いではありますが、これを契機に、就任時からマニフェストに示し続けてきた『市民目線』『現場主義』の基本をこれまで以上に徹底し、何よりも市民の皆さまに喜んでいただける市政を推進していきたいと考えております。

そのためには交通の利便性や東京の隣町という『与えられた環境の良さ』だけに頼らない、積極的かつ徹底的に考え、自ら行動する市政、それを90年前の初心に戻って実施する姿勢が必要だと思っています。実際問題、財政的にも豊かなまちとされる市川市ですが、一方で幾つもの問題を抱えていることも事実なのです」

問題の一例として、田中市長は、住宅都市として順調な歩みを続けてきた市川市の人口が、50万人台を目前に横ばいの状況を見せている背景の理由の一つに、働き盛り世代における近年の転出超過傾向を挙げる。

「例えば近年の市川市には、子どもが就学年齢を迎えようとしている働き盛り世帯



「道の駅いちかわ」の地場野菜コーナー。毎日朝採れの新鮮な地場産野菜が並び

全国一の梨生産県・千葉県でも「市川の梨」（地域ブランド）はトップクラスの産出額を維持。田中市長も東京・大田市場でトップセールスを実施（本年8月3日）

に、転出傾向が比較的多く見られるというデータがあります。実際、都心から至近で、東京より地価の比較的安い市川市は、若い世帯にはとても暮らしやすいまちなのです。その半面、子どもが生まれて何年かした後に、2人目の子どもを持ちたいとか、就学年齢を迎える頃に、今の家は手狭だからもう少し広いところに住みたいというよ

市川市

(千葉県)

市 政 ル ポ



毎年実施する「いちかわ三番瀬まつり」では、梨の剪定枝で作った漁の仕掛け「ボサ」の引き揚げ体験を実施。捕獲後の生き物の観察会も行う

うな状況になったときなど、より敷地が広い家を求める世帯の何割かは、市川市よりも地価の安価なまちへ引っ越すという傾向があるらしいことも、各種のデータからは見えてきます。

そうした現実を目の前にしたときに、私たち行政がするべきことは何か。働き盛り世代の転出を止めるために補助金を乱発するというような一過性のことではない。市民の皆さまに、とにかくこのまちですつと暮らしていきたい、孫子の世代にもそれを継承してもらいたいと思っていただけるような、シビックプライドが自然に醸成されていくようなまちづくりをしていくしかないかもしれません」

そのためにも、本年に市制施行90周年を

迎えるということは千載一遇のチャンスだと、田中市長は強調する。

「これを大きな突破口と捉え、市長以下、市役所職員が一丸となり、初心に戻って、90周年の次の100周年、さらにその先を見据えたまちづくりに取り組んでいかなければなりません。」

同時に、90年間の歴史の積み重ねの中で、いつの間にか堆積した『市役所のあしき習慣、好まざる習慣』などがあれば、そこからも目を背けることなく刷新していかなければなりません。

そんな決意の下に、本年1月4日の仕事始め式では、昭和9年に市制施行した当時の人々の喜びと緊張感を、90年後の私たちも共有するために、部長級以上の幹部職員は市制施行当時と同じ和服姿で臨んで『初心忘るべからず』の思いを新たに、市制施行90周年の節目の年をスタートしました」

現在置かれた環境面のアドバンテージだけに頼らない行政とは、どのようなものなのか。それは「市民のニーズに対する積極的なアプローチを基に考える、本当に必要な施策・事業の実行。必要な部分にピンポイントで迫る効率性を追求することによって得られる、有効な施策・事業の実施を旨とする市政。初心に戻って行う、そのような施策・事業の積み重ねこそが90周年の先の未来、100周年といわず、もっともつ

と先の未来に向けても持続可能な市川市の基盤を構築すること」につながる――。

田中市長は、そのために今まさに必要な施策・事業として、まず「市制施行90周年を契機に実施する全国発信事業の重要性」を挙げる。同時に市制100周年の先に向けて市川市が目指すべき「持続可能なまち」実現のための、現時点での重点施策の3要素として「①誰一人取り残さないまち／②持続可能で安心快適なまち／③魅力あふれる元気なまち」を、本年度の施政方針にも掲げている。

本欄では今回、その中でも「市制施行90周



取材当日の市川市役所ワンストップ窓口。広いフロアにデスクと椅子が並び、市民のもとへと職員が出向き、手続きが完結する。「市民目線」が育んだ市役所ロビーの活気ある光景

年を契機に実施する全国発信事業」を中心に、取材を実施させていただいた。

市民と盛り上げる90周年 ゆかりの著名人と共に全国発信

市川市の市制施行90周年記念行事は、式典当日となる本年11月3日（文化の日）のちょうど1年前、令和5年11月3日に実施された《第48回いしかわ市民まつり》（大洲防災公園ほか）にて、幕を開けた。およそ半世紀も前から毎年開催されてきた《いしかわ市民まつり》は、令和2年・3（2021）年と連続で、コロナ対策のため「オンライン開催」になっていた。令和4年開催の《第47回いしかわ市民まつり》は、3年ぶりの対面での実施となった。

昨年の《第48回いしかわ市民まつり》では、本年に迎える市制施行90周年のキャッチフレーズ《わくわくするまち いしかわ》とロゴマーク、そしてテーマソング『気球にのってどこまでも』が発表された。同時に令和5年12月からは市役所庁舎など公共施設の入り口にロゴマークのシールが貼られ、出入りする市民の関心を高めている。

さらに、市制施行90周年を全国発信するためのポータルサイト《市川市市制90周年記念サイト》を開設。1年間にわたって実施される記念イヤーに関連するイベントのほか、市川市の90年間の歩みや多彩な顔魅



市川市文学ミュージアム（生涯学習センター内）には、水木洋子をはじめ市川市ゆかりの作家の事績を常設展示

力）などを随時全国発信し、好評を博している。

また、市川市は文化人や各界の有力者たちに愛されてきたという歴史的背景とともに、「ゆかりの有名人」の話題には事欠かない。生涯学習センター内に設置されている《市川市文学ミュージアム》には、永井荷風、井上ひさしほか、かつて市川市で暮らした文化人の業績が常設展示されている。さらに今回の90周年に際しては、歌手デビュー後も含め、思春期から約20年間を市川市で暮らした経験を持つ、さだまさしさんが、市制施行90周年記念を機に《市川市親善大使》に就任したというニュースも大きな話題



市川市は20世紀の日本を代表する画家・東山魁夷が後半生を暮らしたゆかりの地。市川市東山魁夷記念館は全国の東山魁夷ファンの憧れの施設

になった。それらの一つ一つが、まさに市川市の90年間の歩みが醸成してきた「地域財産」といえる。

さらに、そうした華やかな話題の陰で、田中市長が関係各位と語らい企画立案した《卒寿の卒業式》という、心温まるイベントについても、本欄では注目したい。これもまた、田中市長が目指す「誰一人取り残さないまちづくり」の一環であると思われるからだ。

「市川市と同じ昭和9年に生まれ、今年90歳を迎える市民の皆さまは、7歳の時に国が戦争に突入したため、育ち盛りの時代にもろくな食料がなく、終戦直後に小学校の

市川市

(千葉県)

市 政 ル ポ



毎年8月には市川市民納涼花火大会と江戸川区花火大会が同時開催され、江戸川の両岸は多くの観衆で埋まる



市川市中山地区にある「正中山法華経寺」は毎年冬に100日間実施される「日蓮宗・世界三大荒行」の地としてつとに有名

卒業年齢を迎えたため、卒業式すら満足にできませんでした。当時の市川市には小学校が9校あり、その年の卒業生は約1800人だったとされます。現在では大半の方が亡くなったたり、移転されたりしていますが、市川市では市内に在住されている今年90歳の『卒業生』の皆さまに、78年越しの卒業証

書を、現職の市川市教育長からお渡しすることを決定しています。

市川市の誕生の年に生まれ、^{かんなん}艱難辛苦の時代を経て90年後の現在にご縁があつて市川市で暮らして下さっているこの方たちも、まさに『わが市の地域財産』と、私は思っています。《卒寿の卒業式》は、市制施行90周年式典の前日、本年11月2日に挙行いたします

市川市では令和5年度から、90周年以降のまちづくりを意識した「未来につながる施策」をスタートしている。例えば、脱炭素に向けた取り組みのほか、小学校・中学校・義務教育学校・特別支援学校など全ての市立学校の給食費の無償化に踏み切った。ま

た、子ども医療費助成の対象を高校生相当年齢まで拡大し、第2子以降の保育料無償化も開始した。

加えてゴールドシニア（75歳以上の高齢者）の健康寿命の延伸を図り、高齢者の健康寿命日本一を目指すべく、外出支援事業（バス・タクシーのチケット補助）や、高齢者の参加できる各種イベントなどの情報発信も強化している。さらに地域経済の活性化を図るため、市内の約650店舗でキャッシュレス決済ができるデジタル地域通貨ICHI CO（スマホ専用アプリ、専用カードなど）の運用を開始している。

また、令和5年度に性的少数者（LGBTQ+）支援のため、「パートナーシップ・ファミリーシップ制度に係る都市間連携に関する協定」を千葉県内近隣5市と締結。本年度から9市に拡大し、相互の都市へ転出・転入した際の同制度の手続き簡素化など、面的な規模での支援を行っている。

90周年を機に、より一層強化されつつある「誰一人取り残さないまちづくり」の徹底は、「市民目線」と「現場主義」がなければ成し得ない施策であり、誰をも笑顔にする「魅力あふれる元気なまちづくり」「持続可能で安心快適なまちづくり」とも連動する大切な要素だろう。

市制施行91年目以降の市川市における「さらなる歩み」が、今から楽しみだ。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和6年7月22日）